



本学僻地教育研究施設の伝統と新しい出発

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-04-11 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 門脇, 正俊 メールアドレス: 所属:
URL	https://hokkyodai.repo.nii.ac.jp/records/9706

本学僻地教育研究施設の伝統と新しい出発

北海道教育大学僻地教育研究施設長 門 脇 正 俊

北海道教育大学僻地教育研究施設の新しい看板が、平成8年5月17日の移転開所式の際、岩見沢校玄関前と同研究施設事務室前に掲げられました。新しく再出発したこの僻地教育研究施設は、実は本学で最も伝統ある研究施設で、その前史は、昭和24年6月、本学創設と同時に設立された教育研究所を母体としています。本道の自治体や教育関係者を先頭にへき地教育振興法制定運動が高まっていた29年3月、へき地小規模校の多い本道の教育現実を踏まえた本学は、当時の本学唯一の研究施設であった教育研究所を僻地教育研究所と改称し、狭義の本学僻地教育研究施設をスタートさせたのであります。

このように本学は、設立間もない頃から僻地教育研究を重視し、以来四十数年、本研究施設は本学の教育研究のセンター的役割を果たし、多くの研究業績を蓄積してきました。全国唯一のへき地教育関係学術誌といえる本施設研究紀要「僻地教育研究」誌は、昨年度で既に50号を数え、約4百本の論文、調査報告を掲載してきていますが、近年、文部省科学研究費や学内研究特別経費等を利用した別冊の研究報告書も増加してきております。

この伝統ある研究施設も、時代の変化とともに、教育学センターやそれを母体とした教育実践研究指導センター等が整備される中で、少し影が薄くなり、特に、札幌キャンパスがあいの里地区に移転して以来、独立施設を失い、札幌校や教育実践指導センターの小部屋を間借りし、存続の危機に直面してきました。この研究施設は、残念ながら、文部省の予算措置を得ていない学内施設で、大学当局の配慮と学内関係者の熱意で維持されていますが、岩見沢校ではこの伝統ある研究施設の存続といっそうの発展を願い、また、前学長の谷本一之先生や現学長の藤井英嘉先生を始めとする関係各位のご理解や励ましをいただき、阿部秀男分校主事の英断で岩見沢キャンパスへの受け入れを決定し、平成8年4月からの岩見沢移転が実現したのであります。岩見沢校も狭い研究教育施設の中でのやり繰りで、小さな事務室と資料室の2室だけで構成されるささやかな施設ですが、我々は、これを土台として、国際的な小規模校研究センターへの拡充発展を計画しております。

幸い、本研究施設は近年、後藤守前研究施設長のもとで、大規模な共同研究プロジェクトが組織され、国際的な研究活動も活発化してきています。アラスカ大学（アメリカ）、マガダン国際教育大学（ロシア）等の研究協力を得ながら、環太平洋北部地域のへき地教育の比較研究（平成5－7年度文部省国際学術研究）が進められてきました。また、平成7・8年度教育研究学内特別経費による「環太平洋へき地における通信システムの導入による教育方法に関する検討」の成果の上に、オーストラリア・クィンズランド州ジェームズクック大学も加わっての新しい研究プロジェクト「環太平洋へき地における遠隔教育システムに関する研究」（平成9－11年度文部省国際学術研究内定）への準備も始めています。これらの研究成果は、最近の「僻地教育研究」誌にも一部報告されてきましたが、「環太平洋へき地の諸相」（平成6、7、8年度各1冊）と題した別冊の報告書も作成されてきています。

創立以来40数年間、本研究施設を育て支えてこられた札幌キャンパスと歴代の施設長、研究員、学長や本部事務局の方々、特に前施設長を中心とした札幌スタッフの方々には、深く感謝申し上げます。岩見沢スタッフといたしましても、関係各位のご指導をいただきながら、本研究施設のいっそうの発展に努力していくつもりでおりますので、よろしくお導き下さい。

「僻地教育研究」第51号をお届けします。本研究施設の研究成果は、各地の関係各位からの温かいご協力とご指導のもとに生みだされてきました。深く感謝申し上げますとともに、今後とも、よろしくご協力、ご指導下さいますようお願い申し上げます。